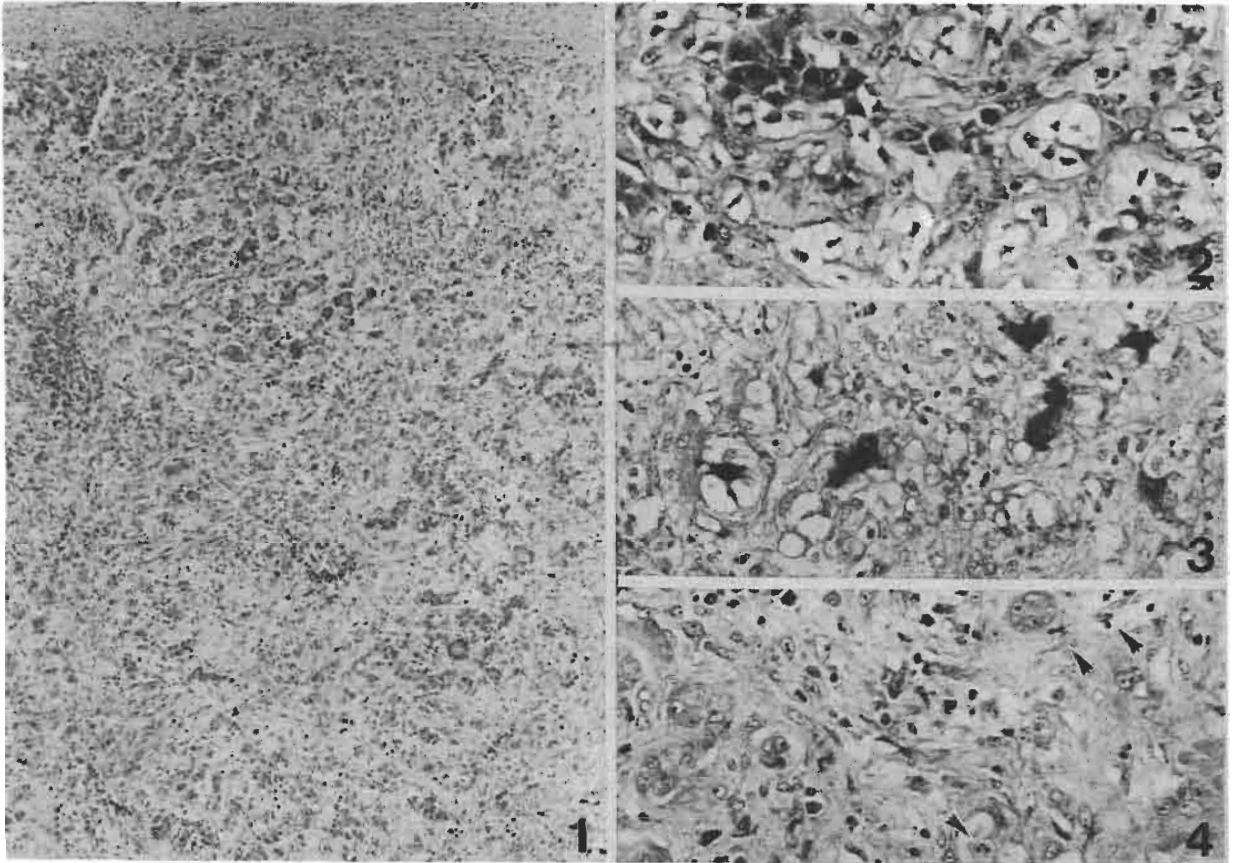


鶏の肝臓

日本生物科学研究所出題 第31回獣医病理学研修会標本No.555



動物：鶏（デカルブ，種鶏），雌，250日齢。

臨床的事項：某養鶏場で，150日齢頃より日に1～2羽／棟の死亡鶏が出るという稟告で，異常鶏3羽の病性鑑定を依頼され，提出例はそのうちの1例である。

剖検所見：肝臓は，表面平滑で全葉にわたり一様に著しく腫大（正常の7～8倍）して硬度・弾力性を増し，濃緑胆汁色を帯びたアミロイド肝様を呈していた。剖面では，小葉間静脈の拡張とportal canal(pc)に一致して白色髓様のモザイク構造が全葉でほぼ均一に認められた。

組織所見：低倍率で先ず目に付く変化は，肝細胞索の島状の分散とそれらの間を埋める間葉系組織成分の増加，被膜の肥厚，pcを中心にした細胞浸潤などである(写真1，×86)。島状に分散した肝細胞は萎縮的で，多くのものは基底側細胞質に空胞を形成していた。また細胞融解を起こして脱落し類洞内皮細胞の増加と偽好酸球反応を伴う領域も散見された。本症例に最も特徴的な変化は，肝細胞索内にあるいは隣接して，さらには孤在性に，細胞質の空胞化としばしば核の変形・萎縮を来たした胆管上皮様(c)細胞の異常増殖である(写真2，×345)。c細胞の多くは胆管状や肝細胞索状構造をとり，時に単一から数個の集団で瀰漫性に認めた。PAS法では，増殖したc細胞周囲に基底膜が存在し，管腔内にPAS陽性

物質を容れているものが多数見られた(写真3，×345)。電顕的にc細胞の細胞質並びに核質は水腫性で淡明化し，細胞内小器官の分散，細胞隣接面にやや發育の悪いjunctional complex，遊離面には短小なmicrovilliと中等度電子密度の粘液顆粒などを認めた。c細胞の増殖はpc付近で著しく，これらの領域では好塩基性の細胞質に淡明大型核及び大型核仁を有した幼若異形細胞とその有糸分裂像(写真4，矢印，×345)が混在していた。c細胞は正常構造に近い比較的大型な小葉間胆管の上皮細胞間にも存在し，上皮の多層化と管腔の狭小化を伴っていた。c細胞及び肝細胞周囲には繊維芽細胞増殖並びに繊維増生が高度で，類洞の狭小化とDisse腔の著しい拡張を伴い，時折アミロイドの沈着を認めた。このほかpcにおいて前及び後骨髄球の活発な分裂増殖と一部リンパ系細胞の浸潤を認めた。

診断：胆管細胞癌(瀰漫型)。肝臓の肉眼的変形を伴わない著しい腫大と形成された管腔内に胆汁を認めず，代わって粘液が存在する点などが本腫瘍の特徴所見と考えられる。提出例は鶏細網内皮症ウイルスに対して高い抗体価を保有しており，また同じ鶏群が白血病ウイルスに汚染していたことなどは，本症例の発生原因を考えるうえで注目すべき事実と考えられた。